

福生の特徴ある近世墓

——自然石舟型墓標の形態とその変遷——

増 澤 直

一 はじめに

近年の地方自治体による文化財調査報告や修史事業にはかなりの進展がみられ、数多くの多様な資料が集積されて

きている。金石資料についても、中世の代表的石造物である板碑をはじめ、近世を中心とした「庚申塔」「供養塔」などのいわゆる民間信仰に関わる石仏、石塔の類の記録報告書も数多く刊行されている。福生市における調査・報告もその例にもれず、一九七四（昭和四九）年に福生市文化財調査報告第二集『福生の板碑』に始まり、一九八九（平成元）年には、福生市文化財総合調査報告書第二十一集『石造遺物調査報告書』が刊行されている。

一方、同じ金石資料の中でも、近世以降の墓標資料（¹）に関しては、資料数が膨大であることや、都市開発などの影響による移動や散逸が激しいことなどの理由で、これまであ

まり調査が進んでいるとはいえなかった。しかしながら、近年になって、墓標資料についても、近世の民衆の社会生活を知る上で、少ない文献史料を補う重要な資料として見直され、報告の数も徐々に増えつつあるようである。

福生市でも、一九八六（昭和六一）年に近世の墓標調査を行っている。その結果、市内の近世墓標一二四二基が確認され、その内の一七〇四（元禄十七）年以前の近世墓標については、形状、銘文についてのデータが福生市史編さん委員会（一九八七）『福生市史資料編 中世寺社』に報告されている。しかしこの調査は、資料解説の冒頭に断つてあるように、近世の数少ない寺社関係の文献史料の補完的な意味で短期間に緊急調査されたものである。従って、前記したように詳細なデータが掲載されているのは、元禄期以前の墓標のみであり、福生市内各墓地の近世墓標数についてもかなりの調査もれがみられる。ただし、福生市域

に分布する近世墓の全般的な概略・特徴については報告、検討がなされており、自然石を用いた墓標が市内では最も多く分布していることがわかっていく。この自然石を用いた墓標は、前掲の福生市文化財総合調査報告書第二十一集『石造遺物調査報告書』刊行にあたっての第一次石造遺物調査においても数多く確認された。

自然石墓標のうちでも自然石の正面に仏像を浮き彫りし、形状が一般にいう舟型墓標によく似ている墓石（以降、本稿ではこれを「自然石舟型墓標」と呼ぶ 図1）には、比較的製作年代の古いものが多いが、これまで特に墓標の形態として取り上げ検討されてはいない。そこで、福生市教育委員会では、一九九四（平成六）年に第二次石造遺物調査として福生市文化財調査報告書第二十七集『石造遺物調査報告書Ⅱ―自然石舟型墓標分布調査―』を刊行することとなった。



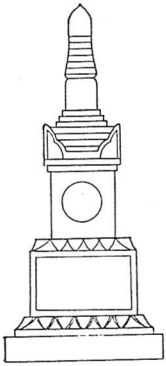
図1 自然石舟型墓標

この自然石舟型墓標調査は、基本的に市内の墓地全域を悉皆調査し、個人墓地については、地図等で確認のできたものについて調査している⁽²⁾。

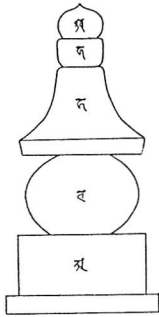
本稿では、この第二次石造遺物調査班が調査し報告した『石造遺物調査報告書Ⅱ』における自然石舟型墓標の調査結果と『福生市史資料編 中世寺社』における調査の原資料をあわせて、報告書では紙数の関係でできなかった福生市における近世墓標の形態の変遷と、自然石舟型墓標に関する各種のデータについて、現段階で可能な範囲での分析を試みることにする。なお、一部で報告書と内容や図表が重複する部分もあるが、ご容赦願いたい。また、墓標の写真・拓本およびその他の墓標個々のデータは報告書を参照していただきたい。

二 福生市の近世墓標の形態とその変遷

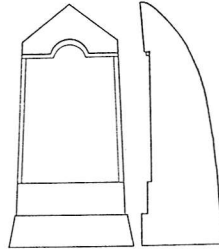
近世墓標の形態とその分類については、坪井（一九三九）における「山城木津惣墓標の研究」以来、研究例が少なかったが、近年になって、いくつかの実地調査に基づく報告が増えつつある。しかしながら、これまでのところ近世墓標の形態とその分類に関しては谷川（一九八〇・八八）などによって類型化が試みられてはいるものの、依然として全国的に統一された分類方法が確立されているとはいえない。というのも、一つには一章でふれたように、墓



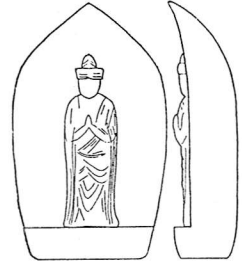
宝篋印塔



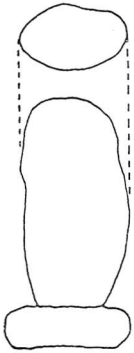
五輪塔



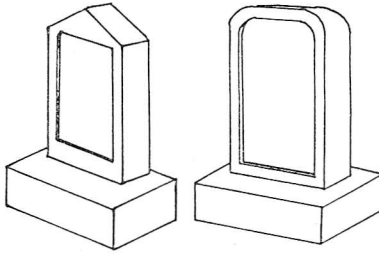
板碑型



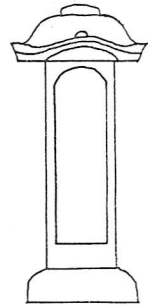
舟型・自然石舟型



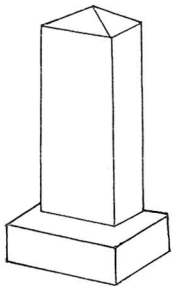
自然石文字型



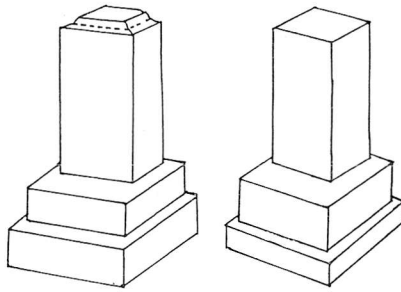
駒型・箱型



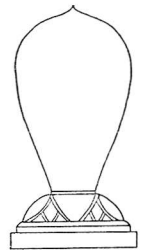
笠付型



角柱型(錐状)



角柱型(平坦状)



無縫塔

图2 墓標形態图(模式)

表1 福生市内の近世墓標の型式別変遷

墓標型式 年代(西曆)	宝篋 印塔	五輪 塔	板碑 型	舟 型	自然石 文字型	自然石 舟型	駒型・ 箱型	笠 付 型	角柱型 (錐状)	角(平 柱担 状) 型	無 縫 塔	合 計	標の割合 (%) 自然石舟 型墓
~1640	1							(1)				1	0
1641~1650	3	1	1			1						(1) 6	16.7
1651~1660						1						1	100
1661~1670			1	3	1	1	2					8	25.0
1671~1680	2	2	9	3	1	6						23	26.1
1681~1690	1	1	13	3	6	24					2	50	48.0
1691~1700			7	4	13	36	1					61	59.0
1701~1710			9	19	18	50	2	(1)	(1)		1	99	50.5
1711~1720		2	7	14	17	48	2		(4)	(1)	2	92	52.2
1721~1730			2	3	39	28	10	2			1	85	32.9
1731~1740		1	1	3	29	20	8	1	(1)		1	64	31.3
1741~1750				1	29	20	7		(1)	(1)	1	58	34.5
1751~1760				3	23	5	15			(1)		46	10.9
1761~1770				4	5	5	23	2		1	1	41	12.2
1771~1780				2	6	2	32	3		1	1	47	4.3
1781~1790				1	5		33	1	15	3	1	59	0
1791~1800		1		3	1		28	1	6	(3) 4	1	45	0
1801~1810				3		1	36		20	6		66	1.5
1811~1820				1	2		33	1	23	5		65	0
1821~1830				2	2		21	26	12	(1) 1		63	0
1831~1840				2	1		22	1	48	15	3	92	0
1841~1850				3	2		17	1	37	22	1	83	0
1851~1860							11	2	24	21	2	60	0
1861~1870				2	2		7	4	16	41	3	75	0
不詳	9	36	32	46	31	30	44	5	13	9	27	282	—
合計	16	45	84	123	233	279	352	24 (2)	228 (7)	140 (7)	48	1752 (16)	—

標調査がそれほど進展しておらず、資料が集積していないこともあるが、近世墓標が、当時の地域の社会的な状況や背景を色濃く反映している点で、地域によって細かい相違

がみられることもあげられるだろう。また、福生市における自然石舟型墓標に限ってみても、これまで福生市に隣接する昭島市の昭島市史編さん委員会(一九七六)によって、

光背型という名称でいわゆる舟型墓標の一類型として一括して記載されているほかは、とくに墓標の一型式として取り上げて報告された例はなく、まさに地域的な特徴をもった墓標型式であると思われる。現福生市内で確認されている近世墓標(一六一五(元和元)年より、一八六八(慶応四)年まで)の形態を模式的に表したのが図2である。これまでの各地での墓標調査における類型を参考に宝篋印塔、五輪塔、板碑型、舟型、自然石舟型、自然石文字型、駒型・箱型、笠付型、角柱型(錐状)、角柱型(平坦状)、無縫塔の十一型式に分類した。その結果を、墓標型式ごとの基数を

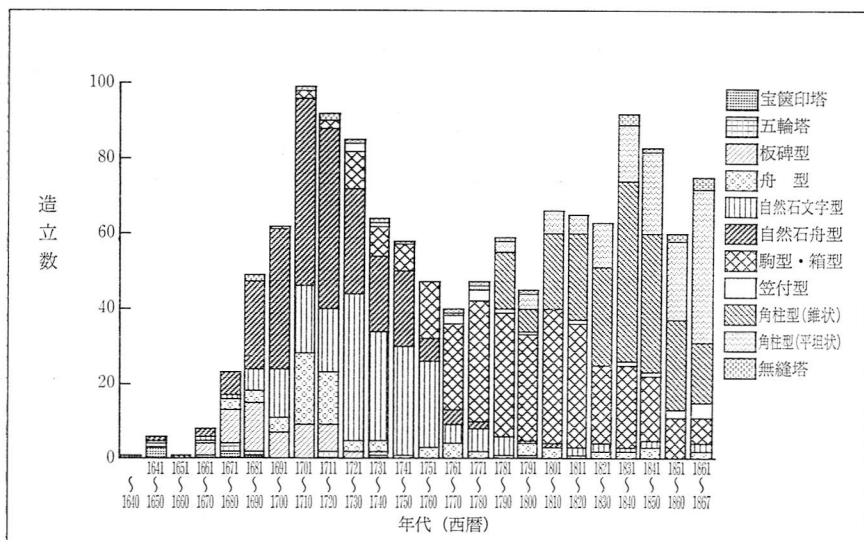


図3 福生市内における近世墓標の型式別造立数の変遷

年代順に示したのが表1である。福生市の近世墓の総数は一五八八基であり、自然石舟型墓標の総数は駒型・箱型の三五二基に次いで二七九基と二番目に多く造立されている型式であることがわかる。墓標の年代は、墓標に彫られた最も新しい年銘をもとにしている。なお、表中の()内の数は、彫られた年銘よりも墓標の製作年が明らかに後年であると考えられる墓石の基数を示す。また、この表1のデータを図化して表したのが図3である。これをみると、福生市における近世墓標の造立時期には二つのピークがあることが読みとれる。一つは、一七〇〇年から一七三〇年、和暦では元禄から享保年間にかけてであり、福生では近世の中で墓標の造立数が最も多いことがわかる。この時期の墓標の大半を自然石舟型墓標及び自然石文字型墓標が占めている。舟型墓標についても、造立数が急増している。さらに注目されるのは、板碑型墓標がこの時期を境にほぼ姿を消すことである。

またもう一つのピークの一八三〇年から一八五〇年、和暦では天保から嘉永年間にかけては、現在造立されている墓標の代表でもある角柱型の墓標がすでに主流となっている。

三 中世の板碑から近世の墓標へ

板碑型墓標と自然石舟型墓標の位置づけ

福生市内で現存する板碑は、福生市文化財調査報告第二集『福生の板碑』の調査結果と、その後の確認調査によつて、六九基が認められている（一九九三『福生市史上巻』）。市史によればその板碑の年銘の最も新しいものは一五一〇年代のものであり、その後約百年以上の間、墓塔や供養塔などの石造物はほとんど造立がみられない。このような現象は福生に限ったことではなく、ほぼ全国的にみられることである。松村（一九八七）では、近世墓塔の造立の普遍化の前段階として、木製塔婆の建立の可能性を述べているが、これも実証されてはおらず、この現象についての明確な解答は未だ示されているとはいえない。

さて、福生では年代の明らかなものでは、一六〇〇年代の半ば頃より、五輪塔、宝篋印塔などの石塔が先駆けとなつて近世墓塔の造立がみられるようになる。しかしこれらの石塔類は、いわば支配者階級の限られた人々の墓標が中心で、一般の民衆が墓標の造立を行うようになる、言い換えれば、近世墓標が普遍化していくのは、その二〇年から三〇年後のちょうど寺請制度が定着する一六八〇年代頃からである。その墓標型式が、自然石舟型墓標、そして自然石文字型墓標、舟型墓標、板碑型墓標である。

中世の板碑から近世墓標への移行の過程についてはこれまで多くの議論がなされている。縣（一九八七）によると、徳川幕府が基盤を築く初期段階において、東國中世否定の

思想が核となり、それが、中世板碑否定となつて、近世初期の墓塔には、五輪塔、宝篋印塔などの板碑とは関連しない形で出現したとしている。その結果として、板碑の形態を避けることが意図的に働いて板碑型墓塔が現れることとなった（板碑型墓塔は形態的には板碑につながる）としている。さらに縣氏は、板碑と近世墓標について形態的にも内容的にも違う点がみられるとして、以下のように整理している（一部筆者改変）。

板碑の特徴

- ① 仏菩薩等を本尊とし、仏体を象徴する。したがつて礼拝の対象となる。
 - ② 造立、供養することによって、死者の成仏を願う
 - ③ 構造的に一観面を基本とする。
 - ④ 生前造立（逆修）、廻忌造立が多い。
 - ⑤ 遺体の埋葬地との関係が希薄。
 - ⑥ 寺院との結びつきが小さい。
 - ⑦ 個人を造立の単位の基本とするが、結衆板碑のよう
- うに集団造立供養する場合もある。

近世墓塔の特徴（板碑型）

- I 戒名を主体とし死者の靈魂を祀る。
- II 遺体埋葬地に建てられる（両墓制は除く）。
- III 家を単位とし、先祖崇拜を含め恒久的に祀られる。

IV 寺院の檀家として墓地管理が結びつく。

V 死亡時の造立が一般的である。

一般に近世墓標の形態の変遷は、谷川（一九八八）の調査結果にもあるように、板碑型墓標から、舟型墓標（自然石舟型墓標を含む）、箱型・駒型墓標、角柱型墓標へと変化していく。福生市においても図2でみたように同様の流れで変遷する。舟型墓標から箱型・駒型墓標、もしくは角柱型墓標への変化はかなり劇的に切り替わっていく。ところが板碑型墓標と舟型墓標の場合には、出現する時代にはあまりずれがないことが多く、板碑型墓標の方が若干早い時期に登場し、同じように舟型墓標よりも早い時期に姿を消す。ただし、造立数が最も多くなる年代は、舟型墓標の興隆期とほぼ重なることが多いようである。従って、板碑型墓標から舟型墓標へ変化するというよりも、板碑から板碑型墓標への移行という一連の流れと同列に舟型墓標を扱ってもよいのではないかと考えられる。

前掲出した縣（一九八七）の板碑、及び近世墓塔の特徴のうち、舟型墓標に当てはまるものを列挙してみると

舟型墓塔の特徴 ①、②、II、IV、V

となり、舟型墓標の場合、墓標中心部に仏像が浮き彫りされている具像塔であることや、戒名が一体もしくは二体であるのが普通であること、また、多くの場合蓮座部分に開

敷蓮華等の文様が刻まれていることなどから、板碑型墓標と比べても、板碑などの中世よりの流れをくむ供養塔としての色彩が強いように思われる。また、縣（一九八七）では、板碑と板碑型墓標の形態の違いの一例として板碑の地中に直接差し込む方式から、台石の上に載せるという構造的な違いも指摘している。ところが舟型墓標のうち自然石舟型墓標に関しては、板碑と同様に直接地中に基部を埋め込むものが圧倒的に多く、この点でも板碑との共通性が見られる。

しかし、だからといって舟型墓標、特に自然石舟型墓標について、板碑に代表されるような中世の供養塔的色彩の強い墓標であると断言するわけにはいかない。そのひとつの理由としてあげられるのが、福生における墓標に使用されている「自然石」が河原の玉石を用いている点である。

菊田（一九八七）によると、わが国の民衆は、仏教寺院の関与を受ける前から、死者を埋葬するに際し、「ハカジルシ」とか「マクライシ」などの自然石を埋葬箇所に使っていた。仏教の影響を受けられて、それに種子や法名を刻むのはごく自然の成り行きであったろうとしている。この説に従えば、福生の自然石文字型墓標はこの典型といえるだろうし、自然石舟型墓標もその発展形態ともいえるのではないだろうか。そう考えると、自然石舟型墓標には、供養塔としての色彩だけではなく、墓の「目印」としての「ハ

カイシ」、つまり本源的な意味での「墓標」としての特徴も合わせ持っていることになる。ただし、この「墓標」の意味は、近世末期より、現代につながる『某々家之墓』といった「家」を中心としたいわゆる参り墓へと移行していく「墓標化」の過程とは異なるものであろう。

四 自然石舟型墓標の材質と形態

自然石を用いた墓標は全国的に数多くみられるが、福生における自然石舟型墓標の場合、きわめて特徴的なのは、前章で述べたとおり、その石材が、玉石などと呼ばれる河原石を用いていることである。しかもその岩質が石英閃緑岩のものにはほぼ限定されている。福生市近辺で、石英閃緑岩の産出するのは檜原村秋川源流域の三頭山以外にはなく、福生市の大半の自然石舟型墓標の原石は三頭山起源の河原石を加工したものと考えてよいと思われる。しかし河原石を墓石に加工するにしても、市域を多摩川が流れているにもかかわらず、手近な多摩川の河原石を使用せず、秋留台地を隔てて流れる秋川の河原石、もしくは多摩川と秋川が合流する福生市より下流域の河原石をわざわざ採取し墓石に加工したのであろうか、疑問の残るところである。

石英閃緑岩は、白が基調で灰緑色の角閃石がごま塩状に見える石材でいわゆる御影石の一種である。岩質は緻密で硬く、風化しにくいのが特徴である。墓石に代表されるよ

うに、永年屋外で風雨にさらされるようなものにもよく用いられる。しかし、加工するには、かなりの技術と労力を要するものと思われる。

同時代の江戸市中の舟型墓標は伊豆石や小松石とよばれる比較的細工のしやすい輝石安山岩製が大半を占めるが、

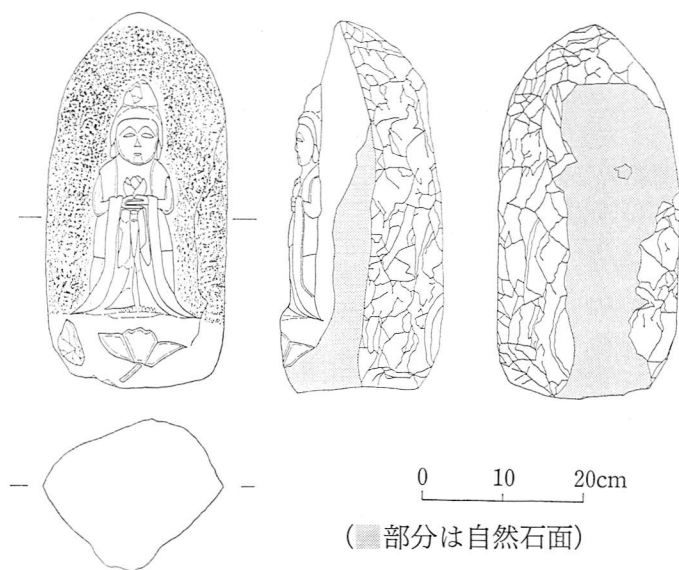


図4 自然石舟型墓標実測図

福生市での造立数は、自然石舟型墓標の半数以下である。

自然石舟型墓標の特徴をさらに細かくみるために、墓石の実測図を製作した(図4)。サンプルはNo.二七九(『石造遺物調査報告書Ⅱ』参照)である。この墓石の材質は石英閃緑岩で、大きさは、高さにして四五センチメートルと、調査した自然石舟型墓標の中ではほぼ標準的なサイズである。墓石背面に河原石本来の無加工の自然面が残されているのも自然石舟型墓標全般に共通する点だが、この墓石の場合は、比較的加工された部分が多く、墓標正面にも自然面があまり残されていないのが特徴である。浮き彫りされた仏像は両手で蓮華をもった観音像であり、像容はほぼ四等身で彫りはそれほど細緻ではない。さらに仏像の下の蓮座の部分に開敷蓮華を意匠化したような文様が線彫りされている。これらの像容や蓮座文様も、福生市の自然石舟型墓標に普通に見られる特徴である。また銘文は薬研彫りで表面が磨耗しており、肉眼では大変読みとりにくくなっている。採拓して年銘を調べてみると、一六八七(貞享四)年とあり、自然石舟型墓標としては比較的古い年代の墓標であることがわかった。

五 福生の自然石舟型墓標の特徴

数量の変遷

福生市内で確認された自然石舟型墓標の総数は、表1に

掲げたように、合計二七九基であり、最古のものは、清岩院墓地の一六五〇(慶安三)年のもので、逆に最も新しい年号のものは、同じく清岩院墓地の一八〇一(享和元)年の記銘のものである。しかしこの墓標は、後に改刻した様子がみられ、時代的にも一基だけ離れている。従って自然石舟型墓標としての最後のものは長徳寺長沢墓地の一七七六(安永五)年のものとなる。しかしこの墓標も正面に仏像が浮き彫りされてはいるが、墓標の形態は駒型に近く、ほぼ全面的に加工されており、自然石舟型墓標の典型からはずれてはざれている。年代ごとの造立数では、一七〇一年から一七一〇年にかけての一〇年間に五〇基と、最も多くなっており、ついでの後の一〇年間に四八基造立されている。この時期は和暦ではちょうど元禄末期から宝永、享保年間にあたり、この時期が近世を通じて福生で最も墓標の造立数が多い時期であったことは前述したとおりである。墓地ごとの造立数をみると、全体的に旧熊川村域での造立数が少なく六〇基、逆に旧福生村域での造立数が一九基とおよそ二倍の数である。これは、他の型式の墓石を総計しても同様であり、当時の両村の人口動態ともほぼ一致してくる。

刻像仏の種類の変遷

自然石舟型墓標の最大の特徴はいうまでもなく墓標正面



図5 自然石舟型墓標（内部くりぬき）

に仏像が彫られていることである。これには、自然石の凸面を利用して仏像が浮き出るようにした、いわゆる浮き彫りによるもの（図1）と、自然石の平らな面をくりぬき形でその中に仏像を彫り残すもの（図5）がある。これらの彫刻された仏像の種類別に年代順に整理したのが表2である。これを見ると彫られている仏像の種類は、阿弥陀如来、聖観音菩薩、地藏菩薩、如意輪観音菩薩の四種にほぼ限定される。これらの諸尊はみな伝統的な民間仏教信仰の崇拜対象である。

ところで、近世における福生の寺院は、千手院、福生院、清岩院、長徳寺が臨済宗、真福寺、宝蔵院が真言宗であった。それにも関わらず、臨済宗の本尊である釈迦如来、真言宗の本尊である大日如來の造形はほとんどみられない。

数の上では、地藏の一一七体が最も多く、如意輪観音が五五体、聖観音が五四体、阿弥陀で四七体の順にほぼ同数の製作がなされている。これを年代順に図化してみると、図6のようになり、比較的古い時代には阿弥陀、聖観音が多く自然石舟型墓標全体の興隆にあわせるように、地藏、如意輪観音の数が増加する。その後は、年代を経るごとに、地藏と如意輪観音に収斂されていく傾向が読みとれる。また、ここではデータの提示はしないが、墓標に彫られた仏像とその墓標の被葬者の性別との関係を見ると、阿弥陀、

表2 自然石舟型墓標の刻像種別変遷

年代（西暦）	像種					合計
	阿弥陀	聖観音*1	地藏	如意輪観音	その他	
一六六一	一	—	—	—	—	一
一六七〇	二	—	—	—	—	二
一六八一	二	—	—	—	—	二
一六八〇	二	—	—	—	—	二
一六八九	三	—	—	—	—	三
一七〇〇	三	—	—	—	—	三
一七一〇	四	—	—	—	—	四
一七二〇	八	—	—	—	—	八
一七三〇	二	—	—	—	—	二
一七四〇	二	—	—	—	—	二
一七五〇	五	—	—	—	—	五
一七六〇	一	—	—	—	—	一
一七七〇	二	—	—	—	—	二
年銘不詳	—	—	—	—	—	—
合計	四七	五四	一一七	五五	七	二八〇*2

*1 観音立像を含む

*2 双刻墓標一体含む

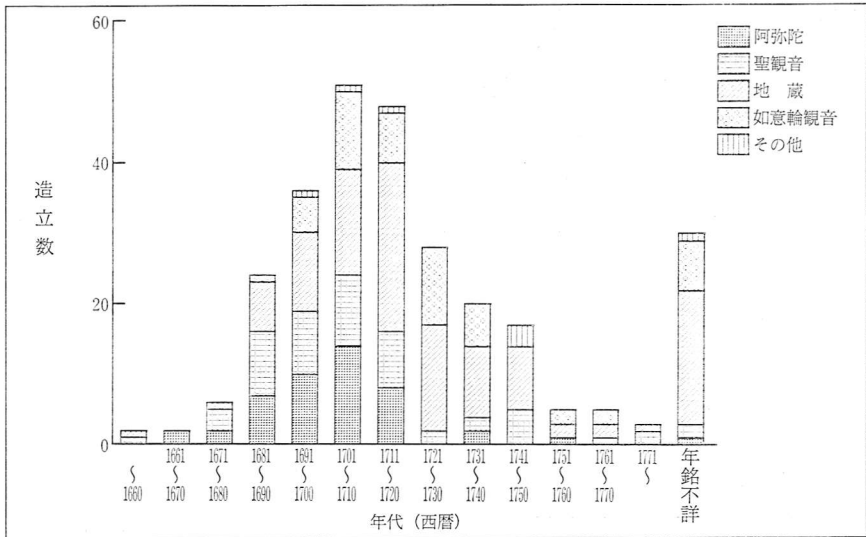


図6 福生市内自然石舟型墓標の刻像種類別造立数の変遷

聖観音では男女の差がそれほどないが、地藏は、男性が中心で、如意輪観音にいたっては、被葬者はすべて女性であるといったように、年代を追うごとに固定化されてくるようである。なお、子供の墓標の多くは地藏が彫られていた。

戒名の変遷

自然石舟型墓標に記銘された戒名の位戒に着目して、それを年代別に位戒の種類ごとに整理した(表3)。四字十禅定門が七八例、四字十禅定尼が七六例と一番多く、次いで、二字十禅定尼の六〇例、二字十禅定門の四六例の順となっている。したがって自然石舟型墓標に記銘された戒名の位戒は禅定門・禅定尼号がその大半を占めていることがわかった。次いで童子・童女号、信士・信女号の順となる。そのほかの戒名としては、上座、大姉、童尼などがみられるが、数は極めて少ない。『福生市史上巻』(一九九三)では、近世における千手院と長徳寺の過去帳を調査し、両寺の檀家が受けていた戒名について、その戒名別の変遷を調べている。その結果、大人の場合は、四字十禅定門・禅定尼がすべての時期を通して最も多いことがわかっている。また市史によると通例では禅定門・禅定尼から時代を下るにしたがって信士・信女号が増加する傾向にあるというが、自然石舟型墓標の場合はほとんど見られず、檀家内の身分の変化はみられなかったものと推測している。自然石舟型

表3 自然石舟型墓標にみられる位戒の変遷

位戒種類 年代 (西暦)	その他							合計		
	二 字 十 禪 定 門	四 字 十 禪 定 門	四 字 十 信 士	四 字 十 信 女	二 字 十 童 子	二 字 十 童 女	そ の 他			
~1660	1						1	2		
1661~1670	1	3			1			5		
1671~1680	2	2	1	3	2	1	1	12		
1681~1690	7	8	11			1	1	28		
1691~1700	7	10	16	7		2	3	45		
1701~1710	7	6	15	13		8	2	54		
1711~1720	5	6	17	13	2	3	3	54		
1721~1730	5	6	5	7		3	2	30		
1731~1740	6	4	4	6			1	23		
1741~1750	4	6	4	4		1	2	21		
1751~1760				3		1		5		
1761~1770	1	1	1	1			1	5		
1771~			2					2		
不詳	8	11	2	8	1	3	3	5		
合計	45	60	78	76	5	4	24	13	22	327

墓標の場合、各々の年代による位戒の種類や数に目立った変化は確認できなかった。また、二字十禪定門・禪定尼の数が四字十禪定門・禪定尼に比べてそれほど数が少なくなっているのは、造立年代が近世中期に限定されていること（長徳寺の過去帳では時代を経るにしがたい、二字十禪定門・禪定尼の数が減る傾向にある）もその一因として挙げられるだろう。

頭字・種子・下置字の種類

頭字（上置字）・種子・下置字のいずれも、中世の板碑銘文にみられ、それが自然石舟型墓標にも継承されてきた

ものと考えられる。福生市内各墓地別に頭字・種子の種類と出現数をまとめたのが表4である。これをみてわかることは、まず、頭字の場合、「帰元」が二〇例、「帰真」が一九例、「帰一」が一五例といったように「帰〇」の二字の頭字が大半を占めているのが注目される。「帰〇」は「死」をあらわし、最も一般的な頭字とされている。寺院別にみれば長徳寺の墓標に最も多様な頭字がつけられている。板碑にしばしばみられる「逆修」は一例のみで、「早世」は子供の墓標にのみ認められた。頭字が現れるのは、主に臨濟宗の寺院である千手院、福生院、清岩院、長徳寺の墓地における墓標と、及びそれら寺院の檀家の個人墓標である。

一方、真言宗の旧宝蔵院墓地、真福寺の檀家を中心である内出共同墓地では、頭字が確認されたのは三例のみで、その反対に、仏・菩薩を標示する梵字で、崇拜の対象ともなる種子が多くの場合刻まれ、臨濟宗各寺院墓地と対照をなしている。種子の種類は、胎蔵界大日如来を表す「ア」が二〇例と最も多くなっている。密教の主尊は大日如来であり、それを具現しているためであろうか、この「ア」のばあいは、墓標に彫られた仏像の種類は問わないようである。次に多い「カ」は、九例あり、これは地藏菩薩を表すが、これは地藏の刻された墓標にのみ確認された。阿弥陀如来を示す「キリク」は墓標の刻像が阿弥陀のほか、如意輪観音にもみられたが、聖

表4 福生市の自然石舟型墓標にみられる頭字と種子

頭字 種子 墓地	地 咄 靈 空 喝 為 逆 田 本 物 早 同 婦 婦 婦 婦										ア ク	イ	ウ ン	キ リ カ ク	サ	不 明
	元	真	一	空	故	婦	世	故	空	寂						
千手院境内墓地	1									2						
千手院牛浜墓地	2	7	2	3						1					1	
内出共同墓地	1								1							
福生院墓地	2	2				1			2							
熊川共同墓地	1															
清岩院墓地	3	2	7	2		1										1
長徳寺境内墓地	3	2	4		1	4	3			1	3			1	1	1
長徳寺長沢墓地	6	2	1							1	1	1		1		
旧宝蔵院墓地									1							
個人墓地	6	3	1							1						

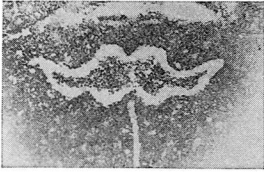
観音を示す「サ」は地藏と同様に、墓標の具像と合致していた。
 下置字に用いられていたのは、そのほとんどが「靈位」であり、寺院や年代による差はみられなかった。他の地域の舟型墓標によくみられる「菩提」は一例も確認されなかった。

蓮座文様のバリエーションと時間的变化

蓮座文様の始まりは、これもやはり中世の板碑における蓮座に端を発すると考えられ、これは、板碑型墓標、舟型墓標にもみられる彫刻である。しかしその文様は、石材によってかなり異なっており、例えば江戸市中の小松石製の舟型墓標の場合、仏像のレリーフの台座を三弁の開敷蓮華に見立てた単純な線彫りのパターンが一般的(図7)であ



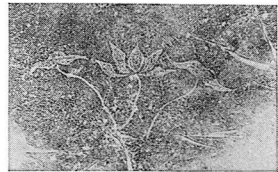
図7 舟型墓標
(新宿区成覚寺)



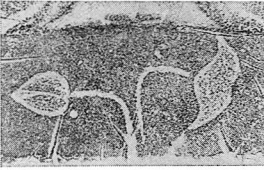
蓮葉



開敷蓮華



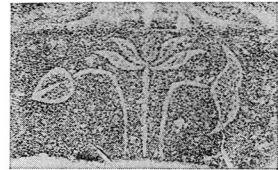
開敷蓮華・蓮葉



未敷蓮華・蓮葉



開敷蓮華・唐草



その他 (開敷蓮華・未敷蓮華・蓮葉)

図8 蓮座文様バリエーション

合計	年銘不詳	蓮座文様パターン					
		蓮葉	開敷蓮華	開敷蓮華・蓮葉	未敷蓮華・蓮葉	開敷蓮華・唐草	その他
四四	二						
六八	八						
九							
二〇	一						
五							
七							
一一一	一四						
二六四	二五						

表5 自然石舟型墓標にみられる蓮座文様の種類とその変遷

り、他方で未敷蓮華・蓮葉を細部にわたるディテールにこだわって彫刻しているものもみられる。

ところで、福生の自然石舟型墓標の蓮座文様の特徴としては、石材が緻密で堅いことも原因の一つであろうが、文様は単純な線彫りのものを中心となっている。しかしそれがかえって幸いしてか、パターン化され図象的にみても、洗練されているものが多い(図8)。

自然石舟型墓標の蓮座文様をパターン分けし、年代別に整理したのが、表5であり、それをグラフ化したのが図9である。これを見ると初期の蓮座文様は、その大半が、蓮葉であり、装飾的な色彩はあまり強くない。しかし、自然石舟型墓標の興隆にもなって蓮座文様のバリエーションも増

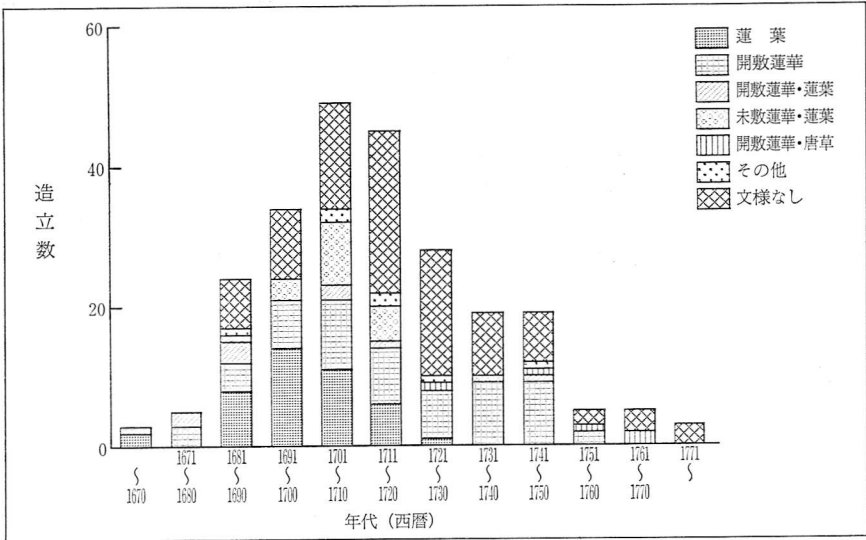


図9 福生市自然石舟型墓標にみられる蓮座文様の変遷

える傾向がみられ、その後は造立数の減少とともに蓮座文様のパターンも減少していく。全体を通しては、開敷蓮華の彫刻が最も一般的だが、江戸市中の舟型墓標で卓越している単純な三弁の開敷蓮華のパターンは三例しかみられていない。

六 おわりに

以上、福生の近世墓標の概略と、特に自然石舟型墓標の特徴とその時代的変遷について述べてきた。自然石舟型墓標の現地調査は、一九九〇年から一九九二年の三年間にわたり、本（一九九四）年ようやくその調査データが、福生市文化財調査報告書第二十八集『石造遺物調査報告書Ⅱ

—自然石舟型墓標分布調査—』として報告される運びとなった。当報告書では編集の都合上、データの諸分析は行えずにいたが、今回、このように貴重な紙面を割いていただき、調査データの分析を行うことができることとなった。

筆者にとって、なにごと墓標調査それ自体が初めての経験であり、その上、調査データの分析などとおこがましい限りだが、多くの方々のご助言やご協力によってなんとか形を成すことができた。専門の研究者の方からみれば、なにかと問題の多いものではあるかと思うが、ご意見、ご批判をいただければ幸いである。

散漫な形での報告となってしまったが、まだまだ自然石

舟型墓標をめぐる研究課題は残されている。今後ともそれらの課題を一つ一つ検討していきたいと考えている。

最後に、共同調査員としてデータの収集にあたってくださった拓本研究会の新井利平氏、佐藤智啓氏、服部八重子氏、室井直美氏、東京学芸大学大学院生(当時)の佐島健氏、西脇智弥氏、資料、情報の提供をしていただいた福生市内各寺院、各個人墓地所有者、福生市史編さん室各位、報告書の編集作業を手伝っていただいた福生市郷土資料室職員、臨時職員の諸兄姉には心より御礼を申し上げます。また、社会教育課文化財係の宮田満氏には、本調査の予備調査段階より、終始貴重なご助言や情報を賜り、なおかつ、忙しい時間を割いて墓標の実測図の作成をしていただきました。末筆ながら厚く御礼を申し上げます。

註

(1) 近世のいわゆる「墓石」については、さまざまな見地によって「墓標」「墓塔」「石塔」「墓碑」など多くの呼び方をされている。本稿では「墓標」という語を用いたが、これは文字どおりの「はかじるし」というような限定した意味ではなく、広義の墓上装置全般を指すものである。

(2) 本報告で扱った近世の自然石舟型墓標が確認された墓地は、寺社墓地・共同墓地の場合、熊川地区では千手院境内墓地、千手院熊川墓地、内出共同墓地、熊川共同墓地、福生院墓地の五墓地、福生地区では、清岩院墓地、長徳寺境

内墓地、長徳寺長沢墓地、旧宝蔵院墓地の四墓地である。また、個人墓地については、合計六カ所の墓地と、道路敷地工事に出土した無縁墓石一基の調査を行った。これは、福生市全図、住宅地図等で確認ができた個人墓地について全て調査し、そのうち該当する墓標のあった墓地について報告したものである。したがって、屋敷墓など確認のとれなかった墓標がある可能性はないといえない。

参考文献

- 敏夫(一九八七)『板碑にみる近世墓塔の源流』『日本の石仏 四一』
- 昭島市史編さん委員会(一九七六)『昭島市史資料編 板碑と近世墓』
- 五日市郷土館(一九八七)『五日市の石仏』
- 大護八郎(一九八七)『墓石 ―その現代的視点から―』『日本の石仏 四一』
- 河野真知郎(一九七八)『中野木の墓石塔調査から』『中野木の民俗』船橋市教育委員会
- 菊田清一(一九八七)『墓地、及び墓石に関する一考察』『日本の石仏 四三』
- 庚申懇話会(一九七五)『日本石仏事典』雄山閣出版
- 庚申懇話会(一九八一)『石仏調査ハンドブック』雄山閣出版
- 佐久間阿佐緒(一九七六)『江戸の石仏 鑑賞と研究』誠文堂新光社

新谷尚紀(一九九二)『両墓制と他界観』吉川弘文館

谷川章雄(一九八〇)『近世墓塔の分類と編年について』『文

研究古連絡誌 三』

谷川章雄（一九八八）「近世墓塔の類型」『考古学ジャーナル 二八八』

千々和實（一九七五）「本門寺近世初期石塔が示す江戸首都化の標識」『史誌 三』

坪井良平（一九三九）「山城木津惣墓標の研究」『考古学』 一〇（一六）

福生市教育委員会（一九七四）福生市文化財調査報告書第二集『福生の板碑』

福生市教育委員会（一九八九）『福生市石造遺物調査報告書』 福生市文化財総合報告書第二十一集

福生市教育委員会（一九九四）『福生市石造遺物調査報告書 II』 福生市文化財総合報告書第二十七集

福生市史編さん委員会（一九八七）『福生市史資料編 中世・寺社』

福生市史編さん委員会（一九九三）『福生市史 上巻』 松村雄介（一九八七）『神奈川の石仏 ―近世庶民の精神風

土―』有隣堂
山本定男（一九八五）「一七・八世紀の区内石塔 ―板碑に続

くもの墓標化への兆しと―」『史誌 一一二』
（ますぢわ・ただし）福生市郷土資料室臨時職員 目黒区在住）